

せいしょ ぼうけん ものがたり 聖書の冒険物語

だいごう
第22号
ねんがつふつか
2022年9月2日

ひかり みいだ ラビが光を見出す

こども しとぎょうでんたい しょう
子供のための使徒行伝 第5-9章

「神が彼らを呪われんことを！」
全ユダヤ教の最高議会議であるサンヘ
ドリンに、大祭司カヤパがクリスチ
ヤン達をののしる声が響き渡った。
「我々が恐れていた通りのことが、
今まさに起こっている！ 彼らの教
義はまたたく間にエルサレム中に広
がっているのではないか！ それも、
私がしくじったせいかな！」

すると、カヤパの義父アンナスが
長い白髭をなでながら穏やかに言
った。「まあ、落ち着きなさい、息子
よ。我々も議会の長老達も誰一人と
して、あんな異端の新興宗教が広ま
り続けるだろうなどは、夢にも思
わなかったのだ。ローマ人を説得し
て、神を冒瀆するナザレ人イエスを
処刑させたのだから。」

「そのことは承知しております。
しかし先週は、彼らの主だった指導
者ペテロとヨハネを始末する絶好の
機会がありました。二人を逮捕し、
議会議でも彼らを処刑することで意見
が一致していたのです！」

「では、なぜそうしなかったのか
？」

「ラビのガマリエル先生が、彼ら
を釈放するようにと議会議を説得して
しまったのです。ガマリエル先生は、
『もし彼らの企てやしわざが人間か
ら出たものであるなら、自滅するで
しょう。だが、もしそれが神から出
たものなら、彼らを止めることはで
きません。まかり間違えば、我々は
神を敵に回すことになりかねないの

です！』とおっしゃったのです。」¹

「わしもガマリエル先生は最も優
れた律法学者として尊敬しているが、
今回は明らかに、間違った助言をお
前にしてしまったな。あのような異
端者らを野放しにすることは、議会議は
重大な過ちを犯してしまった。」と
アンナスは言った。

「我々は二人をむち打った後、イ
エスの名によって語り続けるなら、
更に重い厳罰に処すると脅してから
釈放しました。」と、カヤパが言
った。

「だが、それが何の役に立ったの
かね？ 彼らの人気は日に日に高ま
り、信者は増えるばかりではないか。

おまけに、我々の祭司達までもが、
大勢この新興宗教の隠れた信者にな
っているとのことだ！ カヤパよ、
我々は今すぐに、何とかしなくては
ならない！ そうでなければ、エル
サレム中が、あの死んだナザレ人を
救い主と言うようになってしまっ
たろう！」

「その通りです。脅しやむち打ち
や投獄ぐらいでは全く効き目があり
ませんでした。我々が本気であるこ
とを示さねば。何と言っても、神へ
の冒瀆者や偽預言者は石打ちの刑に
しなければならぬと、モーセが命
じているのですから！ とは言え、
父上。ローマ人は、我々が自ら処刑
することを禁じております。」

「もちろん、それは分かっている。だが、事は深刻だ。今すぐに何か手を打たねば、この新興宗教を止めることは、もうできないかもしれぬ。ただ、我々自身で異端者らを処刑してローマとのいざこざに巻き込まれたりしないためには、直接サンヒドリンとの関係がない者を使わねば。」

カヤパはほくそ笑んで言った。「それは素晴らしい考えです！ ちょうど、それにふさわしい者がおりますよ。ラビのサウロです！ タルソのサウロは、実に熱心な若きパリサイ人で、ギリシャやアジアから来た、ここエルサレムでも敬虔なユダヤ人達から成るリベルテンの会堂の指導者の一人です。サウロなら、我々の宗派のために何でもするでしょう。」

「私も、サウロのことは聞いたことがある。父親も、献身的なパリサイ人であった。」とアンナスが言った。

彼らは直ちに、神殿の敷地内にある祭司達の集会場にサウロを呼び出した。サウロは喜んで、著名なクリスチャンを捕らえ、他のクリスチャン達も始末するという任務を引き受けた。そうすれば、エルサレムにいる他のクリスチャン達への抑止力となり、彼らの活動を止められるかもしれないことに同意したのだ。

サウロは、会堂に属する者達の中から献身的なユダヤ人達を選び出して一団を結成し、クリスチャン達がたびたび教を説いている中央市場に向かった。そこに着くと、ステパノという弟子が、民衆に向かって公然とイエスについて語っていた。

彼らはステパノと議論を始めたが、ステパノの霊と知恵に満ちた言葉に対抗することはできなかった。それで、彼らは賄賂を使って偽証人を立て、「我々は、ステパノがモーセと神を冒瀆するのを聞いた。」と言わせた。

それを聞いた人々は激怒し、ステ

パノを捕まえて、議会に引いて行った。

「この男は、我々の聖所とモーセの律法を冒瀆してやめません。そして、ナザレのイエスが我々の聖所を打ち壊し、モーセから伝わった慣例を変えてしまうだろうなどと言っております！」と偽証人が言った。

カヤパがステパノに、その訴えの通りかと聞いた。ステパノはそれに対し、力強い答弁をした。アブラハム、イサク、ヤコブからモーセに至るまで、さらには預言者や王達も用いて、神があらゆる時代を通じていかにイスラエルの人々に救い主をむかえる準備をさせてこられたか、詳細を追って説明したのだった。

最後に、ステパノはこう言った。「あなたがたは本当に強情で、いつも聖霊に逆らっている！ あなたがたの先祖達と同じです！ あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が一人でもいましたか？ あなたがたの先祖達は、メシヤが来られること

を予告した人達さえ殺してしまったのではないですか！ そしてあなたがたは、当のメシヤを裏切り、殺してしまいました！ あなたがたは律法を受けたのに、守りませんでした！」²

このような激しい叱責に耐えかね、ステパノを捕まえて引いてきたサウロの仲間達と議会は、今すぐこの異端者を石打ちの刑にすべきだということになった。

けれども、ステパノは聖霊に満たされて、天を見つめていた。すると、神の栄光が見えた。「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておられるの見える！」³

これを聞いた議会と群衆らは耳をおおい、ステパノにつかみかかった。そして、ステパノを町の外に引きずり出して、石を投げつけた。

ステパノを殺すことに大賛成していたサウロは群衆の外側に立っていたが、人々は石を投げるために上着を脱ぎ、サウロの足元に置いた。

さて、サンヒドリン議^ぎ会^{かい}が驚^{おどろ}いたことに、ステパノの死^しによってクリスチャンの活動^{かつどう}は衰^{おとろ}えるどころか、今までにないほど、ますます勢^{いきお}いを増^まし、教^{おし}え^{ひろ}が^{って}い^{った}のだ^{った}。それに激怒^{げきど}したのは議^ぎ会^{かい}だけではない^なかった。ラビのサウロも、クリスチャンへの憎^{にく}しみに取^とりつかれ、信^{しん}者^{じゃ}を撲滅^{ぼくめつ}しようとして、暴^{ぼう}力^{りよくてき}的な激^{げき}しい迫^{はく}害^{がい}を始^{はじ}めた。それで、大部^{たいぶ}分のクリスチャンはエルサレムを出^でて行^いった。

ほとんどのクリスチャンを首都エルサレムから追^おい出^だしただけでは飽^あき足^たらず、サウロは、なおも弟^{でい}子^し達^{たち}に對^{たい}する脅^{きょう}迫^{はく}と殺^{ころ}害^{がい}の息^{いき}をはずませながら、大^{だい}祭^{さい}司^しのと^ところへ行^いって、シリアのダマスカスの諸^{しよ}会^{かい}堂^{どう}に宛^あてた正式^{せいしき}な文^{ぶん}書^{しょ}を求^{もと}めた。そこで見^みつけたクリスチャンを全^{ぜん}員^{いん}捕^{つか}まえてエルサレムに連^{れん}行^{こう}する許^{きょ}可^かを得^えるためだ。

*

何^{なん}年^{ねん}もた^たってから、サウロはこのよ^ような告^{こく}白^{はく}を記^ししている。私^{わたし}はナザレのイエスの名^なに逆^{さか}ら^{って}、数^{かず}々^{かず}のこ^ことをしま^{した}。祭^{さい}司^し長^{ちやう}達^{たち}から権^{けん}限^{げん}を与^{あた}えられて、多^{おほ}くの聖^{せい}徒^と達^{たち}を投^{とう}

獄^{ごく}しま^{した}。彼^{かれ}ら^らが処^{しよ}刑^{けい}され^る時^{とき}には、大^{おほ}声^{ごえ}で彼^{かれ}ら^らをののし^り、非^ひ難^{なん}しま^{した}！ 至^{いた}る所^{ところ}の会^{かい}堂^{どう}で彼^{かれ}ら^らを罰^{ばつ}し、無^む理^り矢^や理^りに神^{かみ}を汚^{けが}す言^{こと}葉^はを言^いわせようとし、彼^{かれ}ら^らに對^{たい}してひど^あく荒^あれ狂^{くる}い、さらには外^{がい}国^{こく}の町^{まち}々^{まち}にまで、迫^{はく}害^{がい}の手^てを伸^のば^{した}のです。」⁴

ある日^ひ、サウロが神^{しん}殿^{でん}の護^ご衛^{えい}達^{たち}と共に、ダマスカスに向^むかうほこりっばい道^{みち}を馬^{うま}に乗^のって向^{むか}う^かつていた時^{とき}、思^{おも}いもか^かけ^{ない}、驚^{おどろ}くべきこ^ことがサウロの身^みに降^ふりか^かつた。町^{まち}にも近^{ちか}くな^{った}ころ、天^{てん}から太^{たい}陽^{りやう}よりま^まばゆい光^{ひかり}が差^さしてきて、サウロ達^{たち}をめぐり照^てらしたのだ。サウロは馬^まから落^おち、み^みん^なな地^ちに倒^{たお}れた。すると、こ^こうい^いう声^{こえ}があ^あつた。「サウロ、サウロ、なぜわ^わた^たし^しを迫^{はく}害^{がい}するの^のか？」

サウロは聖^{せい}書^{しょ}を研^{けん}究^{きゆう}してき^きたので、神^{かみ}がしばしば、神^{こと}の言^{こと}葉^はを伝^{つた}え^る預^よ言^{げん}者^{しや}らに超^{ちやう}自^じ然^{ぜん}的^{てき}に語^{かた}りかけられたりすることは知^しっていたが、まさか、自^じ分^{ぶん}にこ^このよ^ようなこ^ことが起^おきるなどとは、夢^{ゆめ}にも思^{おも}っ^てい^なか^かつ^ただ^らう！

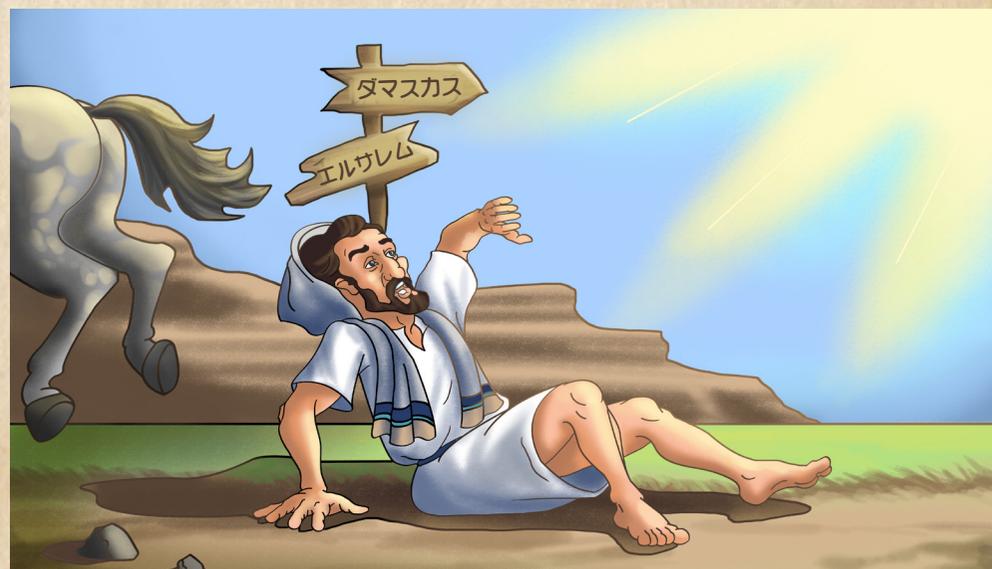
驚^{おどろ}きと恐^{きよう}怖^ふにおののいたサウロは、目^めもくらむよ^ような光^{ひかり}とこ^この声^{こえ}は、一^{いっ}体^{たい}ど^どうい^いうこ^ことな^なの^のだ^らう^うと思^{おも}つたにち^ちが^がい^いない。もしそれが本^{ほん}当^{とう}に神^{かみ}の聲^{こえ}であるなら、どうして「なぜわ^わた^たし^しを迫^{はく}害^{がい}するの^のか？」などと言^いうの^のだ^らう^うか？ 自^じ分^{ぶん}は神^{てき}の敵^{てき}であるもの^{もの}たち^{たち}を迫^{せい}害^{がい}するた^ため^めの聖^{せい}なる任^{にん}務^むにつ^つ就^{ぞん}じているこ^ことを^をご^ご存^{ぞん}じ^じのは^はず^ずで^では^はない^いか。あ^あの^のや^やっ^かい^いもの^{もの}、ナザレのイエスに從^{したが}う、異^{いた}端^{たん}の^{しん}興^{こう}宗^{しゅう}教^{きやう}の信^{しん}者^{じや}達^{たち}を迫^{はく}害^{がい}しているの^のだ^らか^ら！

それで、サウロはその声^{こえ}に向^むか^かつて言^いつた。「主^{しゅ}よ、あなた^あな^なた^たはど^どな^なた

ですか？」

そして返^{かえ}つてきた答^{こた}えは、この若^{わか}いパ^ぱリ^りサイ^{さい}人^{じん}の^{かん}人^{ぜん}生^{せい}を完^か全^{ぜん}に^か変^かえてしま^まつた。その声^{こえ}はこ^こうい^いつ^つた^たのだ。「わ^わた^たし^しは、あ^あな^なた^たが迫^{はく}害^{がい}している^いる^るイエス^いである^る。」

サウロは、頭^{あたま}がく^くら^くら^らした。「神^{かみ}よ！ わ^わが^が神^{しん}よ！ イエス^いよ！ イエス^いこそ^そが、主^{しゅ}な^なのだ！ イエス^いこそ^そが、救^{すく}い^ぬし^しな^なのだ！ 神^{かみ}よ！ 私^{わたし}は^{なん}何^{なに}て^てこ^ことを^をし^して^てしま^まつ^つた^たの^ので^でし^しょう^う！ 主^{しゅ}よ、ど^どう^うか^か私^{あわ}に^に憐^{あは}れ^れみ^みを^を！」



サウロはふるえながら涙した。そして、再度その声に向かってたずねた。「主よ、私にどうせよとおっしゃるのですか？」

「立って、町に入りなさい。何をすべきかは、そこで告げられる。」と主は言われた。

サウロは起き上がって目を開いたが、何も見えなかった。目が見えなくなっていたのだ。サウロは同行者らに手を引いてもらわなければならなかった。そしてダマスカスに着いた後の3日間も、目が見えなかった。

この、かつておごり高ぶっていたパリサイ人であるラビのサウロは、イエス・キリスト御自身による超自然的な一撃によって、馬からも高飛車な態度からも突き落とされてしまった。あまりにも劇的な出来事に衝撃を受け、サウロは飲み食いもできない状態だった。サウロは床に横た

わって色々と考えめぐらし、祈りながら、神からの更なる啓示を待っていた。

3日の後、主はダマスカスにいた弟子の一人、アナニヤに語られた。「立って、タルソのサウロがいる家を訪ねなさい。彼に手を置いて、再び目が見えるようになるよう、祈りなさい！」

アナニヤは言った。「ですが、主よ。あの男が、エルサレムにいるあなたの子供達にどんなにひどいことをしてきたかを、多くの人から聞きました。そして今は、あなたの御名を唱える者は全て捕まえて投獄する権威を祭司長達からもらって来ているのですよ！」

すると、主は言われた。「さあ、彼の元へ行きなさい。彼は、大勢の前で私の名を伝える器として選ばれたのだ！」

そこでアナニヤはためらいながらもそこに行き、ラビが横たわっている部屋へ入ると、こう言ってあいさつした。「兄弟サウロよ。」

サウロはあぜんとした。今までに大勢のクリスチャンに出会ったが、この冷酷な迫害者を「兄弟」などと呼ぶ者は、一人もいなかったからだ。

今までに自分の仲間達を散々苦しめてきた者がこのような哀れな状態にあるのを見て、アナニヤは憐れみを感じながら、こう言った。「サウロよ、あなたがここに来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになり、聖霊で満たされるよう祈るようにと、私をここにお遣わしになったのです！」

アナニヤがサウロの両目に両手をあてがって祈ると、たちどころに目はいやされ、サウロは起き上がって食事をし、元気を取り戻した。

ダマスカスにいた弟子達と数日間をいっしょに過ごした後、サウロは名前をパウロと改め、直ちに会堂へ行って、イエスこそが神の御子であることを宣べ伝え始めた。聖書には記されている。パウロの言葉を聞いた人々は非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでイエスの名を唱える者達を殺した男じゃないのか？ここにやって来たのも、クリスチャンを投獄するためじゃなかったのか？」

しかし、パウロはますます勢いを増し、イエスこそ救い主であると証しして、ダマスカスに住んでいたユダヤ人達を言い伏せた！こうして、使徒パウロの興奮に満ちた任務がはじまったのだった！

きやくちゅう

脚注：

- 1 使徒行伝 5:28-42参照
- 2 使徒行伝 7:51-53参照
- 3 使徒行伝 7:56参照
- 4 使徒行伝 26:9-11参照